

本覚寺々報

第32号
—発行日—
令和3年
2月5日

安
an non
穩

巻頭言

住職

波多野真公

新型コロナウイルス感染症により、世界中で多くの人の命が失われ、経済は衰退し、人々は不安と悲しみの日々を送っています。初めのうちは一ヶ月もすればいつものような日々に戻るものと思っていましたが、数ヶ月後には生活が一変するような事態となりました。

去年の寺報に「ありがとう」の反対の言葉は「あたりまえ」と書かせていただきましたが、まさに日常が「あたりまえ」ではない事に改めて気づかされました。

全国に緊急事態宣言が発令され、新型コロナウイルス感染症に感染しない、させないためには、いわゆる「三つの密（密閉、密集、密接）」が重なる環境を避けることが重要とされています。仏教的言い方をすれば、ウイルスとの縁を切るというものですが、それは同時に人との接点を遮断し、人と接触しないと言うものです。そのこ

とによって、安心感を得るはずの人とのつながりが不安をもたらすものとなってしまいました。

四月十四日浄土真宗本願寺派より、「新型コロナウイルス感染症に関する念仏者としての声明」が発表されました。それには「『つながり』を表面的に捉え、危険なものと否定的に考えてはなりません。世界的な感染大流行という危機に直面する今だからこそ、私たちは仏教が説く「つながり」の本来の意味とその大切さに気づいていく必要があります。」とあります。

たとえしばらく会えない人があっても、互いに支え合い、こころの「つながり」を今まで以上に強く持ちましょう。そして、苦悩の中にあっても、悲しみや不安を共にしてください。お念仏いたしましょう。

合掌

新型コロナウイルス感染症に関する念仏者としての声明

2020(令和2)年4月14日浄土真宗本願寺派総長 石上 智康

現在、新型コロナウイルス感染症は世界中に拡がり、収束する気配を見せていません。日本でも緊急事態宣言が発令されるなど、状況は新たな段階に入っています。

まず、このたびの新型コロナウイルス感染症によりお亡くなりになられた国内外の多くの方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、罹患されている皆さまに心よりお見舞い申しあげます。さらに、特に高い感染リスクにさらされながらも、懸命に治療・対策にあたられている医師、看護師をはじめとする医療従事者の方々に深く敬意と感謝を表します。

こうした危機的な状況において、世界中の人びとが共に力を合わせ、励まし合って対応しています。しかし、症状が出ないために感染に気づいていない人の行動が、感染拡大の一因となっている場合もあるのではないかと指摘されています。感染症の危険性や対処法を正しく理解し、実行するとともに、差別や偏見が拡がらないよう、一人ひとりがお互いを思いやり、注意深く行動していきたいと願っております。

釈尊が明らかにされた苦しみの根源である無明煩惱、また親鸞聖人が「煩惱具足の凡夫」という言葉でお示しになった私たち人間の根本に潜む自己中心性に思いをいたし、このような時にこそ、人と喜びや悲しみを分かち合う生き方が大切ではないでしょうか。仏教には、「あらゆるものは因縁によりつながり合って存在しており、固定した実体はない」という「縁起」の思想があります。新型コロナウイルスの感染拡大の原因は人との接触であるとされ、本来大切な人との「つながり」が、今は安心感ではなく、不安をもたらすものとなってしまっています。しかし、「つながり」を表面的に捉え、危険なものと否定的に考えてはなりません。世界的な感染大流行という危機に直面する今だからこそ、私たちは仏教が説く「つながり」の本来の意味とその大切さに気づいていく必要があります。今重要なことは、仏智に教え導かれ、仏さまの大きな慈悲のはたらきの中、共に協力し合って生きる大切さをあらためて認識し、感染拡大をくい止めることです。緊急事態宣言がコロナ危機を克服してくれるわけではありません。この困難を打開できるか否かは、多くの関係者のご尽力とともに、私たち一人ひとりの徹底した適切な行動にかかっています。

私という存在は、世界の人びととの「つながり」の中で生きているからこそ、やがて、共にこの苦難を乗り越えた時、世界中の人びとと喜びを分かち合えることでしょう。それぞれの立場において、この難局で法灯(ほうとう)や伝統を絶やさないために何ができるかを考え、「そのまま救いとる」とはたらいてくださるお念仏の心をいよいよいただき、共に支え合い、力を合わせるのです。誰もが安心して生活できる社会を取りもどすことができるよう、精いっぱいにつとめを果たしてまいりましょう。

初参式

昨年は、コロナ禍の中での初参式となりました。4名の可愛い赤ちゃんがお参りになりました。

これから明るくお念仏のある環境の中で、お子様が健やかに成長されることを願ってやみません。

勝山市 奥屋 湊仁くん
越前市 丸山 裕輝くん
越前市 高橋 仁史くん
永平寺町 鈴木 大晴くん



永代経・報恩講

毎年、七月一五日～十六日の日程で行われている【永代経】は一座に縮小され、永代経開闢法要のみが勤まりました。

又、十月四日～六日の三日間で行われていた【報恩講】も二日間に縮小され一日一座という日程に変更して勤めさせていただきました。

ともにマスク着用・消毒・三密回避・一時間以内での法要で行われましたが、例年より少ないとはいっても、お参りいただきました。

そして今年は、行きたくても来られなかった方のために、法要をライブ配信するという形もとらせていただき大変好評でありました。

昨年はコロナ禍という事もあり、ほとんどの行事・法要が中止か縮小で行われました。

今年はコロナが収束して、また大勢のご門徒の方々と大きな声で賑やかに勤めできることを心から願うばかりです。



～お寺でオンライン法事を～

昨年からコロナの影響で、予定していた法事や年忌が延期や中止になっているご家庭がたくさんあります。話を聞いてみると、やはり自宅では三密になるのが気になったり、このご時世だからといった意見が多く、その中でもっとも多かったのが「他府県にいる親戚や子供が来られない」という問題でした。そういった話をたくさんの方々から聞き、お寺でなにか力になれないかと考えた結果、この度、本堂に Wi-Fi 環境を整えることになりました。

広い本堂で三密を気にすることなく、遠く離れた方々と共に、オンライン法事をしてみられるのもどうでしょうか。



除夜の鐘 御年頭

年末から降り始めた雪は、大晦日には 30 cm ほどになり、厳しい寒さとなりました。それでも例年に比べると少なくなりましたが、たくさんの方が鐘をつきにやって来られました。

一月一日・二日と行われる御年頭には、毎年欠かさず来られている方々とお会いでき安心いたしました。ただ、やはり正月帰省が難しい世の中になっているので、他府県に出られている方のお顔が見られなかったのが残念でありました。



仏教壮年会

昨年はコロナ禍の中にも関わらず、様々な法要や行事のお手伝いサポートをしていただき誠にありがとうございました。寺務所一同、心から感謝しております。

主な活動内容

本覚寺年中行事の協賛。
 本山・教区・組の行事参加。
 (連研、研修会、聞法のつどい等)
 ゴルフ大会。納涼法話会・流しそ
 うめん。
 その他、例会・新年会・懇親会・
 聖地参拝 等 レクリエーションも
 たくさん。

仏教婦人会

いつも婦人会の方々は裏方として支えてもらっています。皆さまには活気ある笑顔とパワーをいつも頂いております。ご門徒のみなさま、そして寺務所一同、心から感謝しております。

主な活動内容

本覚寺年中行事の協賛。
 花まつり、降誕会、永代経、
 法話会、報恩講 等
 教区・組行事参加
 別院清掃奉仕、
 みりのつどい、茶席 等
 永平寺町内の方を中心に活動しております。

おすすめの一冊



浄土真宗 必須
み教えと歩む

定価 (600 円+税)

「み教え」「歴史」「宗門」という大きな区分で、日々の暮らしの中でみ教えに親しんでいただくための事柄が分かりやすく書かれています。浄土真宗本願寺派の門信徒の方々に、これだけは知っておいていただきたいとの願いから編集された門信徒必携の書。寺務所に見本もありますので、気になる方は是非。

寺だより

うちで取っている新聞の日曜版に小池真理子という作家さんのエッセイが掲載されている。ご存じの方もおられると思うが、昨年亡くなった福井出身の作家、藤田宜永氏の奥様だ。連れ添いを失くした寂しさを、何とも言えない筆致でしみじみと書き綴っている。本当に馬の合うご夫婦だったのであろう。お互いの執筆の合間にコーヒーでも淹れながら文芸論に興じる様子が目に浮かぶようだ。

病の宣告を受けて共に咽び泣き、しかし病状が進むにつれてその苦しみ悲しみはそれぞれが互いに引き受けてゆかなければならないものとなる。細かい砂の粒子が指の間をサラサラとすり抜けて行くのをとどめ置けないように、消えてゆくとするいのちを、それでも大切に掌に握りこむ。作家の目は日々に移ろう事象や小さな心の動きを静かに、丹念に見つめている。諦観。あきらかに、みる。

夫婦関係とは比べるべくもないが、私も三年前に近い友人を失くした。性格は真反対ながらとてもよく馬が合った。境遇が大変似通っていて、そのため突っ込んだ話もしたがかえって愚痴になることもなく、彼女との思い出は楽しいものばかりだ。縦の繋がりは順番なら仕方ないと思っていたが、この先も同じ時代を生きるのだと思っていた横の繋がりが突然切れたのは思いのほか大きな衝撃だった。遠方のため再々会いにも行けず、たった一人病の床で死と向き合う友人を思って私は泣いた。だが訃報を受け取って以来私は泣くことはなかった。もう大丈夫、阿弥陀様がちゃんと仕上げて下さった。私がはからうことは何もない。そう思って阿弥陀様に向けて手を合わせる。

残ったのは話し相手を失って困っている私の姿だった。日々は何事もなく過ぎていくが、その状態にいまだに戸惑うことがある。出合いがなければこんな思いをする事もなかったらうにと思うと、縁というものは本当に不思議なものだ。不思議のご縁に彩られて私は私のいのちを生きる。南無阿弥陀仏をいうお念仏に支えられながら。

聖地参拝

昨年はコロナの影響もあり、毎年恒例の聖地参拝も残念ながら中止とさせていただきました。

そこで今回は私一人で、あわら市にある吉崎御坊のほうへ参らせていただきました。福井県に来てまだ間もない時に一度だけ行ったことがあるだけで、しっかりと回った記憶が無かったので、今回のご縁となりました。

吉崎別院とは？

吉崎別院は通称吉崎御坊と呼ばれ、文明三（一四七二）年本願寺第八代、蓮如上人によって吉崎の山上（通称お山）に坊舎が建てられたことを起源とされています。

現在のお山には、本堂跡を中心に当



時を偲ぶいくつかの遺跡があり、室町中世の寺城の様子を今に残しています。そしてこのお山全域は昭和五十年二月に国の史跡に指定されました。

念力門

まず、吉崎御坊の入り口に見えるのが「念力門」です。



この門は天正十九年（一五九二）豊臣秀吉が京都の西本願寺に寄進したもので元治元年（一八六四）「蛤御門の戦い」の時、兵火から本願寺の堂宇を守った由来により「火消門」ともよばれた名高い門です。

昭和二十四年（一九四九）十一月に西本願寺より百余名の信徒によって京都から約六十里の道のりを十六台の荷車で念仏のかけ声と共に運ばれたものだそうです。

本向坊了願のお墓

本堂でお参りをした後、昔本堂があったお山へ行ってみることに。境内の横にある細い路地の階段を5分程登れば到着です。お山には様々な遺跡がありましたが、私が一番興味を持ったのは「本向坊了願のお墓」です。

毎日朝夕に読誦している正信偈などが記されている声明本。この本には、真っ赤な表装のものが多く見られます。この本の赤色は一説では血染めの赤と云われています。声明本もそうですが、浄土三部経の経本をはじめ、親鸞聖人の著作や御歴代上人の著作などは古来より聖教（しょうぎょう）と呼ばれ、大切に扱われてきました。

文明六年（一四七四）三月二十八日の吉崎御坊火難の時、蓮如上人は何とか火災から逃れることができた。しかしながら、急いで出てきたせいもあり、火中の吉崎御坊に忘

れ物がございました。その忘れ物とは、浄土真宗の根本聖典「教行信証」です。全六巻の教行信証の内の1巻が火の中に置き去りです。しかもこの本は親鸞聖人御真筆のもの。貴重で大切に代わりのきかないものなのです。茫然と佇む中、一人の弟子が「取って参ります」というのです。この方の名を本向坊了願（ほんこうぼうりょうけん）といいます。



一同の制止を振り切って火の海へ飛び込んでいった本向坊が教行信証の巻物を発見し懐に納めてから、引き返そうとしますが、引き返そうにも戻り道が塞がって引き返すことができません。このままでは命もろとも巻物まで燃えてしまうと、意を決した本向坊は懐中より小刀を取り出し、自らの腹を十文字に捌いたのです。自ら腸（はらわた）を引きだし、その腹中に巻物を深く挟み入れられ聖

教が燃えるのを身を挺して守られたのです。

焼けた御坊跡には真っ黒に煤けた本向坊の姿がありました。急ぎやってきた蓮如上人に対し、本向坊が自身の腹を指さし息絶えたそうです。本向坊三十九歳の往生でありました。この本向坊の遺徳を偲び真っ赤な表装の声明本が生まれた一説があります。本向坊のような篤信の行者や同行によって今日、私たちがおみのに出遇う縁が紡がれてきたのです。

嫁脅しのお面

昔、吉崎寺の村にお清という信心深い女が住んでいました。お清は夫と子供に先立たれ、姑と暮らしていました。

お清は毎日熱心に吉崎寺に通って、亡くした家族を弔っていました。しかし姑はそれが気に入らない。村人からも親しまれ、けなげに生活するお清が良い人ぶっているようで、憎くて仕方なかったのです。

お清に一泡吹かせるにはどうしたらよいのか？ 姑は家に伝わる鬼女の面をかぶって嫁を怖がらせてやろうと思いつきました。そしてお清が吉

崎寺に詣でるのを先回りして、面をつけて髪を振り乱してお清の前に飛び出しました。

お清は驚いたものの「はまばはめ、食（くら）わば食え金剛の、他力の信はよもや食むまじ」と念仏を唱えながら逃げました。姑も正体がばれては大変と、家に飛んで帰りました。



家に着いて、面をはずそうとする姑。けれども面は全く顔からはずれません。無理に外そうとすると顔の皮、肉がそげてしまうような痛みが走ります。そこへ嫁のお清が帰って

きました。鬼女の面をかぶった姑に驚くお清。

姑が涙ながらに訳を話すと、お清は「南無阿弥陀仏」と心から唱えなさいと勧めました。念仏を唱えると、なんと面はぼろりと顔からはずれました。以後姑はお清とともに熱心に仏を信心するようになったのでした。（諸説あり）

何を伝えたいのか？

はまばはめ

食（くら）わば食（くら）え

金剛の他力の信は

よもやはむまじ

（意味）

この肉体を食べたければ、食べるがいい。

しかし、私が仏教を聞いて得られた絶対の幸福は、いくらおまえでも歯が立つまい。

金剛は金剛心。金剛心とは硬い心。なにがあっても変わらない、微動だにしない心のことであろう。それだけ仏教を聞くことは素晴らしいことだと。お清は、家族に先立たれたこ

とは大変悲しいことでしたが、それが縁となって、仏教を聞くようになり、あのような歌を歌えるような幸せ者になりました。

どんな悲しみに沈んでいる人でも、人間に生まれてきてよかったと最後、亡くなっていく時でも満足できる幸せを、蓮如上人は吉崎御坊で説いておられていたのでしょうか。

吉崎御坊に行ってみて

今回このようなご縁で吉崎御坊に参拝させていただいて、福井県が真宗大国であると言われる所以が分かったような気がいたしました。福井県と蓮如上人の繋がりは特に深いものであったと確信いたしました。また、蓮如上人と本覚寺の繋がりも深く、蓮如上人が吉崎に滞在中、その傍に絶えずいたのが本覚寺の蓮光（何代目住職かは不明）であったと伝えられております。

実家の九州からは、来たくても中々来れるような距離ではないので、最後に吉崎御坊に参拝でき、大変良いご縁となりました。

【撮受記】

令和三年 年回法要表

一周忌	令和二年歿
三回忌	平成三十一年・令和元年歿
七回忌	平成二十七年歿
十三回忌	平成二十一年歿
十七回忌	平成十七年歿
※二十三回忌	平成十一年歿
二十五回忌	平成九年歿
※二十七回忌	平成七年歿
三十三回忌	昭和六十四年・平成元年歿
五十回忌	昭和四十七年歿

※印は地区によって
されないところもあります



令和三年度の年回法要表です。
お仏壇の過去帳・お位牌でご確認
下さい。

亡き人を偲びつつ、この私が仏法
を聞く行事。これが法事です。

皆様でお参りしましょう。

尚、年忌の申し込みの際は、

氏名・住所・電話番号・年回の種類と

法名・会場を

必ずお知らせ下さい。

「現在を大切に」

過ぎ去った日のことは悔いず、
まだこない未来にはあこがれず、
とりこし苦勞をせず、
現在を大切にふみしめてゆけば、
身も心も健やかになる。

パリー「中部経典」より

ある日突然、呼吸困難になって入
院したり、交通事故で生死をさまよ
うようなことが起こったりします。
不運や災難は、どこに待ち受けてい
るかわかりません。人生には何が起
こるか予想が付きません。明日死ぬ
ということも、まったくないとはい
えないでしょう。しかし、たとえそ
うだとしても、わたしたちは誰もそ
のことを予知することはできないの
です。人間の命は、はかないもので
す。だからこそ、「いま」何があっても
大事なかをよく判断しなければい
けません。

過去のことをいつまでも悔やんで
いるのはむなしいことです。でも、
未来のことばかり夢見ていたり、逆
に明日を心配ばかりしているのも愚
かなことだと、ブッダは言います。

過去や未来よりも、今この現在ど
うあるのが重要です。だから、今
まさになすべきことを熱心になさ

いと教えているのです。現在の自分
のあり方を見きわめた人は、生き方
も自然に定まっていくなのだという
ことをこの言葉は教えています。

同じような禅の言葉に、「日は好
日」というものがあります。お茶の
席の掛軸などにもよく書かれている
有名なもので、唐の時代の雲門文偃
という禅僧の言葉です。

これは、「毎日が穏やかでいい日
だ」という意味ではありません。

日々の一喜一憂にとらわれず、そ
の日の日をただひたすらに「生き
きる」ことができれば、それがいい
日なのだということです。目の前の
ことに左右されず、清々しく生きる
ことが、毎日をすばらしくするので
す。

【ブッダに学ぶ さとりの言葉】

ご紹介

寺務所の加藤さんの後任
でお勤めさせて頂く事にな
りました、野本佳美と申し
ます。お寺の行事の一つづ
つを皆様のご協力で毎日励
んでおります。一日も早い
当たり前だった日常生活に
戻ることを願い感謝を忘れ
ず務めたいです。これから
も宜しくお願い致します。

野本佳美

聖徳太子絵伝御修復が完了しました。

お寺の蔵に永い間眠っていた聖徳太子の絵伝二幅、土佐又平筆という絵師のサインがある他はその絵師がどういふ人物なのか、いつ頃から当寺の蔵にあるのか何も分かってはいません。

痛みがはげしく「こんなもの」と捨てられても仕方のないような状態になっていました

が修復となると半端な金額では済まないだろうとついつい後回しになっていました。

今回分かった事です、収まっていた木箱の裏に次のような書付がありました。

文化十一年歳甲戌

林鐘上院依一二〇〇年開扉修輔

現住 法炬

文化十一年は西暦でいうと一八一四年。今から二〇〇余年前に聖徳太子一二〇〇回忌に当り十七代住職法炬が修復したと書かれてありました。一三〇〇回忌に当る大正十二年は関東大震災がおこっています。そのとき勤めたかどうかは分かりませんが、一九七二年（昭和四十七年）に一三五〇回忌が勤まったと記録に残っています。

令和二年二月五日の門徒大会でお世話方が集って下さったときにボロボロの状態の絵伝を御覧いただき、これを修復して令和四年度聖徳太子の一四〇〇回忌法要を厳修するという事になったのですが、その後新型コロナウイルス感染症という疫病が流行り出したことで今年には門徒大会

も中止になり、今のところ法要の話も保留になっています。早くコロナウィルスが終息し、聖徳太子一四〇〇回忌の法要がお勤め出来る日が来ることを願うばかりです。

本覚寺に伝わる

聖徳太子の法宝物

聖徳太子絵伝二幅（上記）

土佐又平 筆

聖徳太子孝養像（秘仏）

聖徳太子一四〇〇回忌に併せて御開帳法要を予定しております。



木像 像高132.7cm 鎌倉時代

南無仏太子立像



木像 像高69.0cm 鎌倉時代

浄土真宗と聖徳太子

真宗は聖徳太子をもっとも篤く崇敬する宗派であるといわれています。ではなぜ真宗は聖徳太子信仰を取り込んでいたのでしょうか。その根拠は、宗祖である親鸞聖人に帰するところが大きいです。

比叡山での修行をやめた親鸞聖人は、先ず都の六角堂に百日の参籠をこころみました。六角堂は聖徳太子の建立と伝えられ、聖徳太子の本地とされる如意輪観世音菩薩（または救世観音）が本尊であります。

そして九五日目の明け方、救世観音すなわち聖徳太子の夢告（お告げ）を得ました。親鸞聖人はこの夢告の内容を確かめるため、今度は東山吉水の法然上人の草庵へ、やはり百日通いつめ、ついに法然上人の門下になったのです。まさに聖徳太子に導かれて専修念仏の道を選択したのであります。

これが「聖徳太子の媒介なしに浄土真宗は成立しなかった」といわれている所以であります。



令和3年 本覚寺行事予定

◆修正会	一月一日	
◇御年頭	一月一日・二日	
◆御正忌	一月十五日 午後二時	
◇門徒大会	中止	コロナ感染対策の為
◆仏壮・仏婦合同報恩講	検討中	
◇勝山支坊太子講	三月三十一日	
◆花蓮の会	四月十日 午前八時	花蓮植え替え
◇花まつり	四月十一日 午後一時半	保育園児・幼稚園児・小学生、参加自由
◆聖地参拝	検討中	コロナ状況次第
◇懇親ゴルフコンペ	検討中	コロナ状況次第
◆降誕会・初参式	六月十三日 午後一時	別途申込
◇勝山支坊永代経	六月三十日	
◆清掃奉仕	永代経前	仏教婦人会
◇掛所盆参り	七月十四日	午後六時より読経
◆永代経	七月十五日・十六日	開闢法要
◇納涼法話会	八月十六日 午後四時	コロナ状況次第
◆清掃奉仕	報恩講前	仏教婦人会
◇報恩講	十月四日・五日・六日	
◆勝山支坊報恩講	十月二十一日	
◇除夜会	十二月三十一日	午後十一時四十分頃

【感謝録】

(敬称略)

お供え(米・野菜・果物・菓子等)

猪野口 帰山 信勝

北四ッ居 塚谷 徹雄

乙坂今北 今宮 忠夫

東古市 青木 喜代美

大月 清水 勲

鯖江 與佐岡 賢二

阿難祖 前田 清司

重立 田中 克義

諏訪間 竹澤 義明

小塩辻 鹿野 啓信

上北野 富田 幸二

春江 朝田 勇次

笹尾 山本 清勝

宝永 長谷川 光宏

経塚 中村 昭一

大和田 舟木 政義

舟寄 齊藤 敏昭

寄贈(蠟燭)

光明寺 齊川 嘉長

ご奉仕

除夜会手伝い

仏教壮年会有志

帳場その他お手伝い

仏教壮年会、仏教婦人会

おみがき

年末 松岡末政御同行

厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。

編集後記

今年は3年前を思い出すような大雪で大変でございました。私は大分県から福井県に来て、もう丸6年が経とうとしています。未だに雪には慣れません。

そして私事ではありますが、自坊の手伝いをする事が決まり、3月をもって本覚寺を退職することになりました。本覚寺ご門徒の方々には何から何までお世話になり頭が上がりません。またご縁があれば。

短い間ですが、有難うございました。

【攝受】

ここに第三十二号をお届けします。

皆様方の寺報原稿をお待ちしております。写真や絵、俳句などでも結構です。どうぞご投稿下さい。

発行所 浄土真宗本願寺派

和田山 本覚寺